

講 演

キリスト教学校の使命

——震災と試練の時代にあって——

近 藤 勝 彦*

講演 I

はじめに

キリスト教学校、キリスト教大学でそれぞれ専門の学科を担当しておられる先生方に、「キリスト教学校の使命」について話す機会を与えられ、感謝申し上げます。今日のような震災と試練の時代に、あるいはモラル・ハザードが言われ、敢えて申しますと、一般に倫理崩壊が起きつつある時代に「キリスト教信仰に支えを見出す大学とその教育」にどのような意味があるのか、お話しできればと思っております。またキリスト教学校、特に大学の意味は、教育だけではなく、学問研究・科学研究上の責任があり、文化形成上、また社会形成上の確かな思想の構築に対して責任があります。その文脈で「キリスト教信仰の真理認識」にどのような意味があるかにつ

* 東京神学大学学長

いてもお話したいと思います。現代は宗教文化史的に複雑化した社会の時代であり、一方では技術開発が世俗主義的にラディカルに進みながら、他方ではイスラム社会の問題やイデオロギー的に閉鎖的な国家や社会も存続し、文明の衝突現象も見られます。多神教の理解や宗教的寛容の問題をめぐって決して宗教的理解力が成熟しているとは言えない日本社会、日本の学術社会の中であって、キリスト教大学の使命や存在意味は決して小さくはないと思われます。しかし現実には、その使命を果たし、意味を満たしていくことに、どのキリスト教大学においても困難を経験していることも事実です。そんな現状の認識に立って、キリスト教大学の教育と学問研究の意味についてお話したいと思っています。

1. キリスト教信仰とキリスト教文化

はじめに、キリスト教信仰の生き方には、人生と世界にとっての意味と力の源泉である神を信じる「信仰」があります。しかしそれだけでなくその信仰によって支持され、規定された「キリスト教文化」もまた存在します。この当たり前の事実のお話から申し上げたいと思います。キリスト教信仰は、聖書が証言しているナザレのイエスを神が立て、油注がれた方、つまりメシア＝キリストである方と信じる信仰ですが、これはまた迫害を受けていた時代にキリスト教徒のシンボルにされたイクスース（魚）の語が示すように、イエス・キリスト・神の子・救い主と信じる信仰で、つまりはナザレの主イエス・キリストの人格と生涯、その出来事（十字架と復活）の中に神がご自身を啓示されていると信じ、その啓示における神とその御業を信じる信仰です。この信仰がやがてギリシャ・ラテンの文化、さらにはその他の文化との交流、それらとの戦いや摂取、そして改変を通して、「キリスト教文化」を生み出しました。現在なお生み出しつつあります。キリスト教学校、とりわけキリスト教大学は、起源的に言いますと、そう

したキリスト教文化世界の中から生まれた一大文化価値です。古い大学には神学、医学、法学の学科があり、それ以外をリベラルアーツ（教養学科）と言い、それらは哲学で包括されます。私はチュービンゲンに留学したことがあります。チュービンゲン大学も15世紀に発する中世以来の大学ですから、やはり神学、医学、法学が中心にありました。私の息子は、エディンバラで建築史の学位論文を書きましたが、学位はPhD、建築史でなぜ「哲学博士」なのか、それは大学の歴史的由来からきているものです。

日本の大学は、特に帝国大学ですが、明治期の日本が当時の列強に習った国家形成を目指し、特に当時の新興国家ドイツに手本をとった中で形成されました。19世紀の70年代に近代国家の形成に向かった帝政ドイツが天皇制日本の手本になりやすかったと思われまふ。そこでベルリン大学（フンボルト大学）が日本の帝国大学の手本になりました。しかし神学部がないことと、工学部があることが典型的に違います。工学は大学の中にはないのが本来の大学の伝統でした。こした大学の歴史は、国家よりも古いものです。ハーバード大学などのように新しい大学でも国家より古いことと、工学部がないことはヨーロッパの大学と共通しています。申し上げたいのは、現代に継続されている大学は当初、キリスト教文化世界から由来しているということです。コルプス・クリスチ（キリストの体・教会）だけでなく、「コルプス・クリスチアナム」（キリスト教的世界）があったということで、「信仰」から言いますと「教会」が重要な中心ですが、同時に「文化世界」があり、そこでは「国家」と共に「大学」が重要な拠点でした。

金城学院大学の「キリスト教センター」のステートメントによりますと次のようにあります。「『福音主義キリスト教に基づく女性教育』をという建学の基本精神に基づいて、社会の各方面で活躍する女性を育成してきた」。寄付行為にも「この法人は、福音主義のキリスト教に基づき、かつ教育基本法及び学校教育法並びに私立学校法に従い、教育事業を行うことを目的とする」とあります。キリスト教信仰がキリスト教的教育を伴い、

キリスト教文化をもたらしてきました。教育というものは、文化の一部ですが、人間、人格に直接関係しますので、文化を超えている、文化以上のものを必要とすると言うべきでしょう。信仰はその「文化以上のもの」に触れているわけです。

建学の精神にある「福音主義キリスト教」とは何かということにも触れる必要があるでしょう。「福音主義」という用語には通常、もともとの意味と、歴史的な意味、さらにはもう少し独特な使用法、ほぼ三つの意味があると言ってよいと思います。「福音主義」はまずは「宗教改革」「宗教改革的キリスト教」を意味します。一般にヨーロッパではこの用法で用いられています。内容から言いますと、「聖書のみ」と「信仰のみ・信仰義認」、つまり伝統や習慣よりは、聖書から御言葉に聞くことに集中するキリスト教、そして人間の行為や教会への寄進、巡礼といったことより、ひたすら神の恵みに信頼する信仰のキリスト教です。「福音主義」とは「宗教改革的精神」という意味であり、そこからさらに転じてその歴史的継承を含めて、ローマ・カトリック主義とは区別されたプロテスタント・キリスト教、プロテスタンティズムのことになります。プロテスタント・キリスト教は、当初の宗教改革だけでなく、その後500年近く経ていますから種々の経験を経ていきます。宗教改革の当初の地域であった北ヨーロッパとイギリスから、さらにアメリカ大陸に、そしてアジアやアフリカに広がっています。それを総称して「プロテスタンティズム」と呼んで、「福音主義」と同義に使用する場合があります。さらにそのプロテスタントの中でも主としてイギリスに発し、アメリカに伝わった「敬虔主義的なキリスト教」、ピューリタンの、禁欲的（アセティック）キリスト教のことを意味する場合があります。「福音主義のキリスト教」自体がつまり興味深い研究対象なのです。特に第三の意味の福音主義は、信仰の自発性を強調し、自主的に祈り、聖書に親しむ、伝道的で、アセティックな生活態度のプロテスタント・キリスト教で、東アジアのプロテスタント教会は多くこの流れで成立

しました。「アスケーゼ」(禁欲, 修練) というのは, 目標に向かってエネルギーの集中を図る自己管理を伴った意志的で高度に倫理的な態度を意味します。そういう意味での人間教育があるわけです。マックス・ヴェーバーやエルンスト・トレルチが「禁欲的プロテスタンティズム」と呼んだ生き方です。もう時代も変わり, そのままということではできないでしょうが, 東アジアのプロテスタント教会にはこの流れが底流にあり, モラル崩壊の時代に新しい形で再生することが期待されると私には思われます。

2. 文化を越える信仰 (福音)

キリスト教信仰はただ文化を生み出しただけではなく, その中には時には激しい「文化否定」の契機もありました。文化は人間の業ですが, 信仰には人間の業を否定し, 神の働きに抛り頼むところがあるからです。文化は人間的で, しばしば民族的なものにもなりますし, 時代的にもなります。それに対し信仰には人間でなく, 「超越的な神」に触れる, この神との関係が信仰の生命です。それには文化, 民族, 国家などを越える面があるはずです。教育というのは, 一方で文化的, 社会的ですが, しかしそれだけでなく人格的で, 文化も社会も越える面があるのではないのでしょうか。教育は国家の支配や社会の要請を脱するところがあります。社会や国家は自分たちのために教育すると考えるかも知れません。数年前の安倍内閣時代に「教育基本法」の改正が行われた頃の議論も, 国際世界の競争に日本が対抗できるように教育を立て直すという国家の見地からの議論が主でした。それは国家のための教育という考え方です。しかしキリスト教信仰の観点から言いますと, 国家は, 民族や時代とともに特別絶対的でも, 最高でもありません。「ガイザルのものはカイザルに, 神のものは神に返しなさい」(マタイ 22・21) で, 国家に属さないものがあるのです。キリスト教は国家を拒絶はしませんが, 原則的に国家を限定する性格があります。

また文化を限定したり、改変する性格があります。テルトリアヌスのように「アテネとエルサレムに何の関係があるか」と言った教父もありました。アシジのフランチェスコに発するフランチェスコ会の厳格派の中では一日30分以上の読書は禁じられたという話を聞いたことがあります。文化や学問で人間は救われるものでないことを知っているわけです。

キリスト教大学におけるキリスト教教育はですから実は「激しい緊張」を含んでいる面があります。人間は大学などで救われるものでないことを知っている大学であるということです。そうなると人間は教育などで救われるものではないということにもなるでしょう。そういう自己否定を含み、自己の挫折における超越への窓をもった教育、そういう大学がキリスト教大学ではないかと思います。

3. 変化や創造の勇氣

こういう点から考えますと、日本社会は、案外、国家や民族を超える「超越の原理」が希薄な社会に思われます。たとえばナショナリズムなどに対する「批判原理」が欠如しているのではないのでしょうか。日本の多神教が一神教に勝るなどと無批判的によく言われます（この夏、塩野七生さんの「ローマ人の物語」の最後のあたりを読んでいたら、あれほど古代ローマ史と詳しく取り組みながら、彼女の多神教理解にはかなりがっかりさせられました）。日本宗教史の問題で、丸山眞男などがよく言うように、日本は批判や抵抗の拠点が破壊されてきた国土であると思います。ロバート・ベラーが日本の明治期の近代化について「勇氣の拠点」がないといったことを書いたことがあります。ヨーロッパ史で言うとコルプス・クリスチアヌムの中には皇帝の権力を限定した教皇権がありました。帝国も国家も、強力な対抗馬として教会を常に意識していました。やがて国家と異なる「社会」という領域が出現し、国家を相対化します。人格としての人間の主張、

そして人権の主張も、この国家を相対化する視点と切り離せません。人格とその自由はカイザルのものでなく、神のものであるという視点が重要なわけです。

文化や教育で重要なのは、ナショナルな地平や国家的な地平を超えていくものです。人間の地平も超えていきます。聖書で言いますと「預言者的なもの」がなければならぬでしょう。残念ながら日本の神道はそういう超越的な抵抗の精神的拠点にはなりませんでしたし、仏教寺院も徳川300年の間、政治支配の道具になったものです。教育や文化形成において重要なのは、超越に触れて、それ自体を超え出る面に触れること、超越的な神に触れることではないかと思います。内在主義的宗教では批判原理にはなりません。全体を変化や新しい出発へと駆り立てることもできないでしょう。アイデンティティはただ「保守」「守旧」によるのではなく、超越と結ぶことで、異なるものにも、新しいものにも開かれていく、それが正しいアイデンティティであると思われます。

4. キリスト教学校の使命

日本に現れたキリスト教的思想家の中にも信仰もしくは宗教が「文化」を超えた面を持つことを語った人々は幾人もおりました。たとえば宗教哲学者波多野精一は「自然」「文化」「宗教」の三段階を区別して、人格の領域を、「文化」でなく「宗教」に結び付けました。あるいは南原繁は、政治哲学者ですが、政治の価値（正義）と区別して、真、善、美の価値を置き、それらを超えて「聖」もしくは「愛」の価値を置いて宗教を語り、科学や道徳にも侵されず、まして政治に侵されることのない価値領域として語りました。南原が戦時にあっても天皇制の日本主義からも当時のナチスへの傾倒からもまったく超脱して「時代を超えた目」を持ち続けたのは、彼の「価値併行論」と呼ばれるこの価値思想、特に超越への信仰があった

ためと言われます。

キリスト教大学とその教育にはこういう時代や民族社会、今なら情報社会をも超えた超越への視点が重要ではないでしょうか。それは文化をもたらずけれども、それを超えた視点、社会に貢献するけれども、それを超えた視点を持っていることだと思われまます。「超越の視点」とは何でしょうか。それにはそれなりの特質があり、キリスト教では典型的には「預言者」の中に、そしてまことの預言者であるイエス・キリストの中にその具体化をみえています。その超越の場は「神の言葉」によって保持されます。大学の教育と研究の中で申しますと、自分たちの教育や研究を超えて、超越との出会いの場を持っている、それがキリスト教大学の特徴でしょう。それを「神の言葉」に置いているのが福音主義的です。ですから聖書が説き明かされ、神の言葉がその都度新しく語られる「礼拝」が大学をキリスト教大学として支える不可欠な拠点であることを承認することになります。その都度新しく超越の言葉を聞くことが大切です。

また超越に触れる姿勢として「祈り」が重要ではないでしょうか。キリスト教大学とは「祈る大学」です。祈りをもって教育し、また研究するわけです。日本の知性は祈りをあまり重んじません。それどころか軽蔑しがちです。一般にも祈りは軽く見られ、非理性的、非知的なこととされているのではないのでしょうか。それはかなりの程度愚昧としか言いようのない「明治啓蒙」以来、あるいはそれ以前からかもしれませんが、本当の祈りを知らなかったからです。つまりは祈る相手を知らなかったからでしょう。明治初期の日本人第一世代のキリスト者海老名檀正の話の中に、祈ることができなかったという話が出てきます。人間が砕かれていないと祈れないということもありますが、それだけでなく教育の問題もあったのではないかと思います。「鬼神を恐れず」という教育がありました。祈りは稲荷神社や御利益宗教の迷信・邪教と結びつくと言われていたからです。海老名は、熊本洋学校に入学し、ジェーンズ先生から英語をならい、let us

prayと言われて、英語教育で祈りを学んだと言われます。人生をかけ、その方の前に生き、その方の前で死ぬ、そういう人生をささげて悔いない相手、真の君主を見出したのが海老名の第一の回心になりました。「君の馬前で死す」と教わってきたはずなのに、その主君である藩主を「廃藩置県」で失ったのは、当時の青年にとって、おそらく大政奉還や明治維新そのものよりはるかに大きな事件ではなかったかと思われます。そのように死にどこを失った青年がキリスト教の神の中に真実の君主を見出す経験をしたわけです。今、震災と試練の中での教育は、ナショナリズムでもヒューマニズムでもない、古い村落社会のコミュニティに回帰することでもないでしょう。そうしたものの少なくとも一端の「断絶」を持った人間の新しい生き方として、「祈り」を教えなくてはならないのではないのでしょうか。

最近、江田五月氏が法務大臣の頃、死刑の執行ができない理由に「理性的な人間には死刑はなじまない」と語ったと新聞で紹介されたことがあります。生命の尊厳は言うまでもなく、大きな主題です。しかしそれは人間理性の話でしょうか。理性の話でいえば、現にある法の執行のできない人間は法務大臣になるべきではないでしょう。生命の尊厳は理性以上の根拠を必要とするでしょう。これも祈りに通じている問題です。

真剣な人生は祈りを持ちます。作家の大江健三郎氏があるキリスト教女子大学での講演で「信仰なき者の祈り」という話をしたことがあります。障害を持った子供を育てる親として祈っている自分に気づいたという話です。誰の人生にも祈りがあります。人間は虚無の現実の中で人間として形成されるのではありません。「より大いなる方の守り」のもとで人間は人間として成長すると言うべきでしょう。誰もが「無言の祈り」を持っています。その祈りに言葉を与える教育をすべきであると思うのです。神の言葉を聞き、祈る中で、キリスト教学校の使命は新しく受け取りなおされ続けるものです。キリスト教大学の代表者にはキリスト者が必要とされる理由の重大な一つは、こうした祈りの人を必要としていることだと思います。

講演 II

さきほどは、どちらかと言いますと、「教育」についてお話をしました。あまり触れられなかった科学や学問とキリスト教の係わりについて今度は少しお話して、それからまた教育の話に戻りたいと思います。

5. キリスト教信仰と学問・科学

現代の文明は、一方で価値の文化や分裂の中にいる面があります。それぞれの学問や科学は独立の領域や独自の方法、独自の論理を持ち、別の学問の論理によって支配されることを拒否します。学問の自由と言えば、国や企業、その他人間の生活領域の支配を脱して、学問のための学問、科学のための科学に終始しようとするでしょう。この方面の学問の進行は回避し難く、次々と細分化し、専門領域化して、独自論理を強調するあまり、独自の文法世界の中に生息することになって、他の学問や社会との共通言語を失う結果になります。その科学に入ると他の世界とは別世界に入ったようになります。しかしこうした学問や科学の専門領域が独自の思考や論理方法によって独立したのは、昔からではありません。近代の学問の成立からですが、それも近代の初めからでもなく、甚だしくは19世紀以降ではないでしょうか。

この学問の独立の中で、キリスト教信仰は相当に「出る幕」を失ってきました。キリスト教信仰が出る幕を失ったということは、神が出る幕を失ったことでもあります。中世のころ、信仰と科学 (pietas et scientia) と言われました。この標語はその後も多くの大学の標語であり続けたものです。つまりパイエティとサイエンス、両者の区別と関連が知られていたわけで、それが根本をなしていました。この基本が失われて、すでに久しく、ピエタスなきスキエンチア、信仰なき科学になっています。科学は信仰と無関

係とされ、文明の中に巨大な二元論が入りこみ、いまでは科学や学問は、無神論一色、世俗主義一色になっています。その結果社会は経済第一主義や国民生活第一主義に押されています。信仰なき科学は、近代の開始期よりも、18、19世紀以来の「キリスト教文化の分裂現象」でしょう。キリスト教大学の内部分裂にもなります。

しかしこの分裂は文化にとっても、従ってまた学問・科学にとっても、決して幸いなことではないと思います。大きな区分から言いますと、自然科学と信仰・その学問である神学との分裂は、一方に「神なき自然」、具体的に言いますと「機械論的に理解された自然世界」と、他方では「自然のない神」の分裂になります。それによって、一方では神は天と地とその中の万物を創造された聖書的な神でなくなりますし、自然世界の方はその「意味」も、理由もなくただそこにあるだけのグロテスクな存在に化します。さらには歴史科学や歴史哲学においても「神なき歴史」が言われ、他方では「歴史なき神」になります。これも幸いなことではないでしょう。「神なき歴史」は、意味も起源も目標も人類が担わなければならないものと化し、それを担えなければ結局は無意味で虚無的な混乱に解体する以外にありません。しかし人類が歴史の究極の担い手役を負わなければならないということは、不可能なことではないでしょうか。第一、人類はまだ統一的な存在になっていません。よほど人間に対して楽観的に信頼を置き、さらにそれを肥大化させ、神格化させなければならないでしょう。しかしそれは知性的にも愚劣な行為と言うほかないように思われます。人類は自らの意志による万物の意味形成もなすという負担は負いきれないと思います。神の否定は結局のところあらゆる領域における意味否定に結果するのではないのでしょうか。

科学と信仰の分裂だけでなく、倫理や道徳とも信仰が分離しました。無神論的倫理、世俗主義的道徳の時代になりました。結果としては「欲望社会」の出現ではないのでしょうか。今や「文明の総崩れの危機にある」と言

っても過言ではないでしょう。こうした近代世界の成立時にはなかった、信仰の排除、ごく限られた人々の実存の決断の中でのみ意味を持つ信仰への極限と、多大な生活領域の非宗教化の現象があるわけです。ただし他方には、日本などなお前近代的な現象が残っており、古き民族宗教が残存しています。あるいは世界は地域独占的な反近代的宗教の支配が行われているところもあります。キリスト教は両面の課題の中にいると言うべきでしょう。一方の世俗主義、あるいは無神論的科学や生活領域、そこでは倫理は功利主義と自己決定に委ねられる傾向、そうした傾向に立ち向かわなければなりません。他方では、非科学的な古き宗教の残存形態、あるいは反近代的な特定宗教の独占支配に対して世界共通文明を基礎づけ擁護する課題があります。そうした中で科学との分裂についても、もう一度考え直すべきときにきているのではないかと思います。

この分裂の歴史そのものの経過を反省してみることも重大でしょう。ドイツ・イデアリスムの崩壊からか、あるいはもっとはやくデカルト、ライプニッツ、カントへの思想の過程で神は自然から、やがて社会と歴史からも、そしてついには倫理や道徳からも外へ押しやられたと考えられます。21世紀はこの流れを問いなおし、もう一度科学と信仰・神学の関係を取り戻すべき時代ではないでしょうか。キリスト教大学はこの科学史・学問史に注目すべきではないでしょうか。実際、近代科学の多くははじめキリスト教信仰・神学との何らかの関係から生じてきたものです。人間学、歴史学、社会科学はもちろん、自然科学もキリスト教信仰との深いかわりの中から成立しました。合理性への信頼も宗教的な根拠をもっておよそ実在するものの筋道とされてきました。17世紀の科学革命やニュートンの信仰など意味深いものだと思います。この夏ニュートンとライプニッツの論争、「ライプニッツ：クラーク論争」を読み返しました。両者ともキリスト教信仰の神を語るために時間・空間の議論を戦わせています。科学史・学問史的に言うと現代はターニングポイントに立っているのではない

でしょうか。学際的な関係の回復とともに、信仰と科学の関係回復が重大な問題です。この点で、キリスト教大学は科学史的に重大な戦略的地点に立っています。現代文明の政策上、重大な地点におかれていると言うべきだと思います。

6. キリスト教信仰による人間教育、女性教育

もう一度、現代における人間教育、人格教育といったことに目を向けてみましょう。いまや「人格教育」といった標語はどこでも聞かれます。しかし人間を「人格」として扱い、「人格」として教育する、それは単純に「もの」とは違うといったレベルの話ではないのではないかと思います。「ただひとりの人」とか、「かけがえのない人」といった表現もなされます。しかし同時にその人格が関係の中にあり、他者のためにあることも表現したいようです。「独自の存在であって、同時に他者と共に他者のためにいる人間」、そういう人として育成する教育ということでしょう。それはそれで誤りとは思いませんが、どういう理由や根拠に基づき、どういう基盤に基づき、どこに資源の根拠を持ち、どこから鼓舞する力を得続けるのかという問題は、重大です。

「人格」という言葉は元来日本語にはなかったことを考えて見るべきではないでしょうか。「人格」とは言うまでもなく *person* の訳語です。「人格」という用語に落ち着いたのは明治20年代とされています。人間を *person* として理解するのは、欧米にとっても外来語ですから、英語にもドイツ語にももともとなかった言葉です。出所はキリスト教的ラテン語ですから、古代のキリスト教世界です。「神の三位」を *persona* と言ったわけです。「パーソナルな神」から来た言葉です。そうすると人間の内的な可能性として人間から引き出されたり、発展したりする観念ではないでしょう。「もの」と比較して、それで確立できるものでもありません。英語の *Education*, *ド*

イツ語で言う *Erziehung* のように引き出せる対象でも、あるいは発展 (evolution) 概念でもありません。すでに潜んでいる可能性が引き出されたり、萌芽的に植え付けられているものが成長発展するというのではないのです。パーソナルな神との出会いの中で、従前の人間の自己主張が裁かれ、挫かれ、審判をくぐって新しく創造的に生かされることによります。そしてそのためには「贖いの犠牲」があり、それによって「新しい契約」に入れられる、そういう断絶と新生がなければ言い得ない事柄です。キリスト教の表現で言うと「神の似姿」として創造されながら、その回復にはキリストの犠牲が必要で、そうした仕方です。「人格」としての人間は語られます。その意味では「人格」はヒューマンイズムの用語ではなく、キリストによる贖罪を通してはじめて回復される新しい恵みの創造による概念です。

エルンスト・トレルチは近代における最良のもの (the best) は、「自由と人格」であると言いました。人格の自由は「自由権」として「人権」の主張にもなります。しかし「キリスト者の自由」は宗教改革者マルティン・ルターが語ったように、キリストの「義」との「驚くべき交換」、キリストが私たちの罪を負い、代わって御自身の義を与えてくださったことによります。キリスト教信仰によれば、人間の尊厳はただ「生きとし生けるものみなひとしい」のではなく、また「万物同根」でもなくて、被造物の中でも特別に「神の似姿」として、神に応答するものとして造られた位置にあり、それがキリストの命を賭した贖いによって神との関係の中に回復されたことにあります。「人格」(person) は神に語りかけられ、神に応える中に深い根源を持ちます。それゆえこの自由は、神の憐みに根拠するものとして、他者への奉仕になって現われると宗教改革者は主張しました。

人間教育の中に「自由と人格」の教育がなければならないと思いますが、福音主義のキリスト教に基づくキリスト教大学にはそれを教育の課題とする特別な理由があると言ってよいでしょう。

しかし現代の教育にはそれだけでなく、さらに色々な課題があるでしょう。人生観や歴史観の教育が必要ですし、現代の倫理的危機に耐え、新しい倫理に生かす教育、忍耐や信頼を教える教育が必要でしょう。キリスト教的人間理解を鮮明にし、キリスト教的女性理解を求める必要もあるでしょう。何かすでに出来上がった固定観念があるわけではありません。「キリスト教的女性教育」という金城学院大学の教育目標にも創造的な発見と表現の努力が必要でしょう。

聖書の視点で「女性教育」というと、典型的には「マリアの姿」があります。主イエスの誕生の次第には、マリアとともに、ラハブやルツといった女性の名が出てくることはよく知られています。いずれも決然として後悔しない人生を生きた女性です。神の計画のために身をささげた女性です。マリアは「お言葉通りこの身になりますように」と神のご計画を肯定し、ルツも「お言葉通りにいたしましょう」と言います。謙遜で、従順な姿勢ですが、与えられた使命に命をかける勇気を示した女性の姿です。エステルに同じです。「決然として後悔しない、自己憐憫にとらえられない」そういう女性です。

東京神学大学はいろいろな源流が合わさってできた神学大学ですが、その中でも最も古い源流は、明治6年の横浜にできたアメリカ改革派教会の宣教師ブラウンの神学塾です。この宣教師サムエル・ブラウンの母は、ヒュベ・ブラウン（1783-1861）という人です。この方の讃美歌が二つ日本の讃美歌に掲載されています（307番、319番）。貧しい育ちで他家のお手伝いをしながら信仰生活を生きた人です。生まれた子供にサムエルと付けたのは神に捧げる意味で、この子が神学教師になり、宣教師として、1859年母の死の直前、50歳で日本にきました。ヘボンと共に聖書の日本語訳を行い、最初期の日本人キリスト者に神学を教えて「横浜バンド」のリーダーになりました。母の祈りと教育が実を結んだのではないのでしょうか。

女性教育には、社会で活躍する女性を育てると共に子供を育てる女性、

本当の意味で地に着いた教育者を育てることが含まれています。その人の根本に信仰を持った人生観、世界観、歴史観、倫理観に生きる力になる教育が必要です。

7. 試練を受けるとき

現代は試練の時代です。特に先進的発展諸国が世界的な経済不調の中にいます。失業率が高い時代が続いています。少子高齢社会の中で、若い人々に負担がかかっています。将来に借金を積みながら年金や社会保障を行っていると言われます。今度の震災のための国債発行も赤字国債ですから、今、貯金している人々の蓄えに依存している面もあるでしょうが、将来に積み残す面もあるでしょう。こうした状態はすでに基本的に20年続いています。今後数十年続くのではないのでしょうか。試練は経済や災害だけではなくありません。モラルの曖昧化、一種のアノミー状態が来ています。私はもう一度ピューリタンのもの、アセティックな生き方の回復、それも律法主義で他者を裁くのではなく、主の赦しの中に共に置かれ、他者を喜んで肯定し、新しく生き返らされる必要があると思っています。この試練の時期はなお当分続くのではないのでしょうか。その中でその人の正体が現れます。その人が受けた教育の実力が試されると言ってもよいのではないのでしょうか。

試練にあっては、二種類の生き方があると、アウグスティヌスは『神の国』の中で語りました。それは今日と同じような、あるいはもっと激烈な試練の時代でした。異民族の侵入による略奪、あるいは飢饉や災害によって、ローマ帝国が減んでいく時代でした。二種類の生き方とは、「試練の中でもみ殻のようにくすぶり、煙を出す」か、それとも「試練の中で炎に焼かれ、不純物を燃やされ、打ち直されて、黄金のように輝く」かだと言うのです。その違いの根本には、何ものによっても破られない神の愛（ロ

マ 8・38-39) による新生にかけた希望を失わない、大いなる方との信頼関係の中に置かれていることが決定的でしょう。信頼に基礎づけられた希望と平静さは、災害と試練の時代の重要な徳であると思います。

8. 信仰の靈性を養う

キリスト教信仰を伝え、試練の中での守り、神がご自身の御子の命を注ぎ尽くして守ってくださっていることを伝え、その中での「平安」を伝える必要があります。復活の主が「平安あれ」と言われ、「安心して行きなさい」と言われる。不安の時代の中であって神による、キリスト・イエスによって生きる目標と共に、その守り、「平安」「安心」を伝える必要があります。貴女は守られている、大いなる方の支持、サポートがあることを信じてよいと伝える必要があります。試練であって守られていないのではなく、神の恵みに結ばれ、支えられています。結局は失われていく物を与えることよりも、結局は衰えていくその人自身の力を養うことよりも、失われず、衰えることのない大いなる方の支持と守り、それゆえの平安を伝える。そこから学ぶ力も生きる勇気も湧いてくるのではないのでしょうか。

脇道だらけの話に終わったようにも思いますが、皆様のご参考になることが一つでもあれば幸いです。ご清聴有り難うございました。

注記 本稿は、2011年9月15日、金城学院大学で行われた第42回金城学院大学教員キリスト教セミナーにおいて「キリスト教学校の使命」と題して講演した内容をまとめたものである。